

【一宮基督教研究所サマー・スペシャルに向けて】

G.E.ラッド著『終末論』から読み取る九つの遺言①

— One Chapter, One Message, from Ch.1 to Ch.3 —

【導入】

今日から、三回シリーズで、一宮基督教研究所の今年度の取り組みとしての「サマー・スペシャル」について紹介・案内させていただきたく思います。これは、教え子であるK B I 卒業生の発案で開始されたものですが、同時にわたしたち夫婦が二十数年前、共立基督教研究所での神学の研鑽を終えて、郷里であるこの一宮に帰って来ました時に、「家内とわたしに、この大きな家と恵まれた自然環境の中で多くの人たちのための、キャンプやセミナーができないだろうか」という思いが与えられたことに淵源があります。

その後、神学校での講義やいのちのことば社からの「キリスト教神学」の翻訳、「神学辞典」の原稿、神学会誌の論文、神学会での講演等に明け暮れ、そのようなことを考える間もなく、ひたむきに前に向かって走り続け、二十数年たってしまいました。しかし、この一月の「教え子からの要請」があり、受けとめて祈り準備しているうちに、その昔に抱いた「夢」を思い起こしました。募集開始とともに、チラシとプログラムの原案を作ってくれた教え子たちは、諸事情により、参加が難しくなりましたが、神様はその「思い」を無にすることなく、また「わたしたちに当初に与えられた夢」の実現させるため、力強く働き続けてくださいました。現在の参加者は、わたしの所属団体である「日本福音教会」J E Cの教職者とその周辺の方が申し込んでくださっています。しかし、この範囲を超えて広く参加が可能なセミナーです。

*

わたしは、ここでわたしのスタンスを申し上げておきたいと思います。それは「I love two JEC!」という立場です。一つ目のJ E Cは、わたしの所属団体である「日本福音教会-JEC」です。もうひとつのJ E Cは、「Japan Evangelical Churches」つまり、わたしはここで「日本にある福音派系諸教会の総称」を意味しています。わたしは、神学の研鑽と神学教育において、生涯一貫して目指し、取り組んできたことがあります。それは、日本の福音派系諸教会は「聖書を神によって靈感された誤りのない言葉」とであると信じて「福音理解」を形成していますので、聖書が許容している多様性の範囲はあるにしても、その福音理解においては90%以上が同じであると思います。そのような考え方に基づき、わたしは第一義的には、所属団体「日本福音教会J E C」のため、次に教派を超えて、日本各地にある福音派諸教会すべてが共有可能な、福音理解の「共通項」を豊かに耕していきたいと願っているのです。その共有している「共通項」を豊かに耕していくための助けとして、聖書神学部門では、G.E.ラッド著作集、歴史神学部門では宇田進著作集、組織神学部門ではM.J.エリクソン著作集を、自分にゆだねられた畑として耕しております。

そのような意識をもって、36年間ひたむきに、所属団体が共同経営する関西聖書学院で

神学教育に携わってきましたが、年齢が 60 歳を節目にして退任させていただき、わたしの本来の「一宮基督教研究所」を通しての継続神学教育の働きに戻らせていただきました。母校の関西聖書学院は「献身者の、奉仕生涯の最初の三年間の基礎神学教育コース」であり、わたしの一宮基督教研究所は「献身者のみならず、信仰者すべてを対象にした、信仰者生涯全般にわたる生涯教育コース、また継続神学教育コース」と、相互補完関係で捉えることができます。

さて、今回の I C I サマー・スペシャルでは、福音派の聖書神学の領域で、大きな働きをなし、福音派神学教育の基準的テキスト『新約聖書神学』をはじめ、数多くの優れた著作を残した、フラー神学校の新約聖書神学の教授、G.E.ラッドの『終末論』から学びます。この本は、ラッドの生涯の最後に書かれたもの、絶筆、遺作であり、彼が生涯で取り組んできた「福音理解」のメッセージの本質を集約した内容です。そのような意味で、わたしはこの絶筆である『終末論』から、ラッドのメッセージを聴き取るとき、わたしにはそのメッセージは、ラッドがまさに召されようとしている死の床で書き残した「遺言」のような気がします。

今朝は、ラッド著『終末論』の 1 章、2 章、3 章から、最も本質的なメッセージをひとつずつ聴き取り、それをお分かちすることで、参加申込された方には「学びのための心備え」、参加を迷っておられ方には「誘い水」、参加できない方には「のぞき窓」を提供させていただきたい。

*

【序】

最初に聖書を開きます。聖書箇所は、使徒 20:17-32 です。「パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ」とあります。その前後を説明します。(中略)

*

【遺言としてのメッセージ①】

ラッド著『終末論』第一章から聴き取る、ラッドの第一の遺言メッセージとは何でしょうか。第一章は、「聖書は…何を教えているのか」という言葉で始められ、「教理において最終的に権威のあることばは、新約聖書の中に見出されなければならない」ということばで閉じられています。初代教会において、教会は「旧約聖書諸文書」とともに存在しておりました。ただ、ユダヤ教徒とは、その旧約聖書の解釈が異なっておりました。教職者であれ、信徒であれ、わたしたちが知らなければならないことは、「ユダヤ民族の盛衰史」を記した旧約聖書をどのように読み、解釈し、適用するのか、ということが大切です。

今日、旧約聖書の光の中で、新約聖書を再解釈しようとする人たちがいます。そして、別の人たちは、新約聖書の光の下で、旧約聖書を再解釈しようとします。どちらが正しいのでしょうか。ある人は、前者を選び、別の人は後者の解釈を選択します。わたしたちは、どちらを選ぶべきなのでしょう。どちらでも、大差ないのでしょ。そのあたりを十分に熟慮し、考え抜かねばなりません。旧約聖書をどのように理解し、どのように解釈すべきなのか、という最も根本的な問題がそこに関わっているのです。そこを読み違えると、聖書解釈

の全体、福音理解の全体に大きな影響を及ぼします。そこを理解しそこなうと、「羊を迷いの道」に連れ込んでしまうことになるのです。神学教育であれば、「盲人が盲人を導き、穴に落ちる」ことになる教育になってしまうのです。わたしは、この意味で、ラッドは、この一章で、彼が一番語りたかったことを書き残していると思います。

わたしたちは、ICIサマー・スペシャルで、「教理において最終的に権威のあることばは、新約聖書の中に見出されなければならない」ということばの意味を深く熟慮し、考え抜きます。このことは、言葉では簡単なようですが、自らの血となり肉としていくためには、「繰り返し、繰り返し」学び続け、牛の食事のように「反芻」し続けることが大切です。

先日のJEC牧師会に、フィリピンへ行かされている日本人宣教師の方が来られ、フィリピンの宣教事情を話されました。フィリピンは、癒しや悪霊の追い出し等の神の奇跡的なみわざを通して、二回大きなリバイバルを経験したそうですが、その後「残ったもの」はほとんどなかったそうです。それで、その反省を踏まえて、今では「10人、20人規模で福音を根づかせる」地道な取り組みがなされており、それが着実な実を結んでいるとのことでした。

使徒 20:21「主イエスに対する信仰」、24「神の恵みの福音」、27「神の計画の全体」、32「みことばは御国を継がせる」力がある、とある通りです。

*

【遺言としてのメッセージ②】

ラッド著『終末論』第二章から聴き取る、ラッドの第二の遺言メッセージとは何でしょうか。第二章は、「新約聖書は、イスラエルについて何を教えているのか」という言葉で始められ、「真のイスラエルは、アブラハムの肉の子孫と同一ではない。旧約聖書で字義通りのイスラエルに適用されていたものが、ユダヤ人も異邦人も含む教会に適用されている。教会は新しいイスラエルである」と断言されています。

今日、わたしたちは、「イスラエルと教会」の関係について、混乱した理解に囲まれているように思います。ある人たちは、さまざまな理由で、ある特殊な理解に傾斜していています。ここ十年ほど前にはあまりみられなかった傾向です。わたしは、神学教師として、「建物の傾きを調べる水準器」のようなものを内にもっています。わたしは、ここ十年、二十年の間に、特殊な教えによって、「福音理解」という建物が傾いた教会が増えて行っているように思い、そのことを深く懸念しています。わたしは、そのような傾向が将来、どのような結果をもたらすのかを思うとき、空恐ろしい気が致します。わたしは、今はあまり悪影響がないように見えても、十年、二十年かけて、その影響は「ボデー・ブロー」のようにきいてきて、やがては大きな「福音の変質」というかたちで結実するのではないかと深く懸念しているひとりです。

米国のテレビ伝道についての研究書「ブラウン管の神々」という本があります。その本は、アメリカでのテレビ伝道における視聴率競争、献金集め競争で、どのように福音理解が変質していったのかが書かれています。最初のテレビ伝道は、「伝統的な福音理解」の提示でありました。だんだんと競争が激化し、「音楽の専門化」が進み、「エンターテインメントの優

れた要素」をもつ番組が勝利をおさめます。さらに競争は激化し、福音理解そのものの変質に手が付けられていきます。視聴者が喜ぶかたちに福音理解が歪曲されていったのです。その究極形態は「富と健康の神学」といわれるものです。テレビ伝道での、成功は、普通のキリスト教会にも影響し、同様の「福音理解」の変質を受け入れている、ヘブル 12:16 にある「一杯の食物と引き換えに自分のものであった長子の権利を売ったエサウ」のような教職者が増えていると思います。

わたしは、このような時期に、ラッドが精根傾けて取り組んだライフワークがなにであったのか、彼が「イスラエルと教会」について語ったメッセージとは何であったのか。深く熟慮して、今持っている「イスラエルと教会」関係理解を吟味するところが必要なのではないのでしょうか。わたしは、年一度、定期健康診断を受けています。血液検査、尿検査、血圧検査、視力、胴回り、体重、レントゲン、胃検査等です。数値が健康な範囲なら、安心です。しかし、異常な数値が出ますと、食生活とか、運動とか、ときには通院治療とかがアドバイスされ、健康の回復がはかられます。

福音理解においても同じことです。今日、これほどの情報社会の中で、さまざまな新しい運動や教えが満ち溢れています。健全なものもありますが、危険なものもまた数多くあります。それらを分析、評価、識別、選択、ろ過していく力が必要な時代です。間違った教えをよく理解せずに受け入れ、わたしたちが継承してきた健全な福音理解におおきな損傷をもたらすこともあるからです。ラッドの本は、わたしたちにとって、「健康診断」のお医者さんのような働きをしてくれます。

20:23「なわめと苦しみ」、24「強暴な狼」「曲がったことを語って…引き込もう」とする人たちが現れる、と書いてあります。「たくさんの人を集めている」とか、「楽しい集会である」ことは「健全性の指標」にはなりません。「楽しいエンタメ」という本があります。第二時世界大戦で、国民を戦争の方向に動員するときに、ヒトラーや日本の軍部が用いた方法は「楽しいエンタメ」の中に「フグの毒」を忍び込ませることでした。人々は、演芸を楽しみつつ、知らず知らずのうちに汚染されていったのでした。わたしたちは、数や献金や楽しいエンタメで判断するのではなく、「福音理解」そのものが健全であるのかを、よく見極めないといけないと思います。

*

【遺言としてのメッセージ③】

ラッド著『終末論』第三章から聴き取る、ラッドの第三の遺言メッセージとは何でしょうか。第三章は、「信仰者は、死後、天国で、肉体を離れた祝福の状態にあり、不死の者たちとともに、そこに住む—そのような考え方は、聖書神学というよりも、ギリシャ的な思想の表現である」という言葉で始められ、「信仰者は、死後、復活を望みつつ、神の臨在の中であって、キリストとともにいる。」これは祝福の状態ではあるが、聖書が全体として証言しているのは、「最終的な贖いには肉体の復活と変貌を欠かすことはできない」と主張されています。すなわち、クリスチャンにとっての救いとは、この被造物世界からの逃避的飛翔が

最終目標なのではなく、キリストの復活が意味するところは、クリスチャンは贖われた被造物世界において、復活のからだ着せられて、生きるものとされる、ということなのです。

ですから、わたしたちの、今のこの被造物世界に管理者として生きること、わたしたちの肉体をもった生、これらには非常に深い意味があり、そこにおいてどのように生きるかということは、贖われた被造物世界での永遠の生と深いつながりがあるのです。その意味で、わたしたちは「現在の生」において天国のみを仰いで無為に過ごすことはできません。「新天地の生が、御霊にあって生きるわたしたちの生」において到来しているのだという意識をもって生きることが大切なのです。

20:29-30 「凶暴な狼」「曲がった教え」「引き込もう」とする人々とあります。わたしは、今日の少子高齢化の中での、教会の宣教の停滞において、あらゆる壁を取り除いての宣教協力が主張される声を聞きます。しかし、ある程度、教理的な共通項を確認しておくのであれば、宣教協力を通して、交流が盛んになり、これまで健全な福音理解を保持してきた群れに「曲がった教え」が濁流のように流入し、腐れ縁ができてしまって「曲がった教えの運動に対するアレルギーも知らず知らずのうちに緩和され、ひさし貸して母屋とられる、ミイラとりがミイラになってしまう」、つまり「健全な福音理解」がいつのまにか別の福音理解にすり替わってしまう危険があるのではないかと懸念するのです。

そのような意味で、わたしたちは、使徒的福音→古代の正統信仰→宗教改革の信仰等に根差した、2000年間の教会の歴史の中で、吟味され、信憑性のある「健全な福音理解」のエッセンスを、この夏、ラッドの著作から学びたいと思うのです。

*

【まとめ】

今朝は、福音派諸教会「共有の福音理解」を耕し、根づかせるという意味で、ラッドの絶筆『終末論』の三つの章から三つの遺言としてのメッセージに耳を傾けました。このようなメッセージを、広く、深く、高く、長く、掘り下げていく取り組みの場が、ICIサマー・スペシャルです。そこには、ラッドの15冊の著作集も視野に入ります。そして、わたしの翻訳の重荷も、解き明かしの重荷も、それらの中にあります。もしこのような取り組みに関心のある方がおられたら、どなたでも参加申込して下さいましたら感謝です。では、お祈りしましょう。

※今回は、「要約」ではなく、「説教原稿」そのものを掲載させていただきます。